金沢の教科書を考える市民集会アピール

現在、世界各地で戦争が行われ、子どもたちを含む多くの命が奪われています。その背景には戦争当事国の独りよがりな歴史観があり、それが問題の平和的解決をはばんでいます。歴史認識の社会的影響力の大きさをまのあたりにし、一国の歴史教育の意味を再考せざるをえません。

私たちは、2015 年から金沢市の中学校で使われている育鵬社の歴史教科書は、そのような独りよがりの歴史観に立ち、それに伴って国際的に通用する人権感覚の欠如したものと考えています。私たちは子どもたちが、日本文化が他文化の影響を本質的に受けていないと思う国民にも、自虐の口実のもとに史実から目をそむける大人にもなって欲しくありません。私たちは子どもたちが、客観的批判に耐えうる歴史観と高い人権意識を持ち、国際社会で共に生きられる大人に育って欲しいのです。

育鵬社歴史教科書は特に日本近現代史において学問的批判に耐えない記述が多いだけでなく、その古代・中世・近世史においても学識の欠如によると思われる間違いが目立ち、政治的批判とは別に高校大学受験上不利になるという不安も広く聞かれます。また民主主義や人権に対する見識の無さも多く見られます。育鵬社教科書のそういった問題点は広く知られるようになり、前回 2020 年の採択において多くの大手採択区が再採択を見送り、全国における採択率は 1%にまで落ち込みました。その中でなお採択を継続した金沢市の見識に全国から懸念の声が寄せられています。

今回 4 年ぶりの中学校教科書採択年にあたり、私たちは今度こそ金沢での育鵬社教科書の採択を止めたいと思い、この市民集会を開きました。そして育鵬社教科書の問題点や、金沢市での採択過程の不透明さを再確認しました。また、全国でこの教科書がなぜ採択されなくなったかという報告を受けました。さらに中学生時代に育鵬社歴史教科書を使わされた高校生の疑問と、こんな教科書を後輩に使わせたくないという訴え、あまりにもジェンダーの視点が欠如しているという保護者の疑問、叙述が整理されておらず使いにくいという教員の声なども聴きました。

このような教科書が全国の動向を無視しなぜ金沢市で使い続けられなければならないのでしょうか。私たちは金沢市における育鵬社教科書再採択の中止を改めて強く求めます。

2024 年 6 月 16 日　金沢の教科書を考える市民集会・参加者一同